

葬送と肉体をめぐる諸問題

Issues Related to the Body and Funeral Attendance

長沢利明

NAGASAWA Toshiaki

はじめに

- ① 肉体は不浄の存在か
- ② 死霊への恐怖と防御
- ③ 葬地の聖地への転化
- ④ 農地への遺体の埋葬
- ⑤ 日本のカンニバリズム
- ⑥ 特殊葬法に見る肉体の保護
- ⑦ 分割される肉体 (1)
- ⑧ 分割される肉体 (2)

おわりに

【論文要旨】

共同研究の課題にもとづき、いわゆる霊肉二元論の再検討のための基礎的な作業として、その周辺問題をさまざまに考察した。二元論の一方を構成するところの肉体存在のあり方を、葬送習俗との関わりの中からとらえ直してみると、いろいろな課題が浮かびあがってくる。たとえば、従来いわれてきた遺体の不浄性ということは、沖縄地方の実態を見るかぎり、あまりあてはまらず、死者の遺体はもっと生者に身近な存在であったと思われる。また、沖縄地方の葬送儀礼には死霊への顕著な怖れの要素が見られるが、それは死穢の忌避という感情の生じる以前の原型的なものだと思われる。葬地の聖地への転化は、かつての本土でも広く見られたことであつたろう。農地に遺体を埋葬する習俗も各地に見られ、部分的・限定的なものとはいえ、カンニバリズムの事例すら一部で見られたことを考えれば、日本人の肉体観は決して単純なものではなかったことがわかる。特殊葬法としての鍋かぶり葬の存在は、生者がいかに死者の肉体を死霊から守って保護しようとしてきたかを示しており、それは死者の封じ込めのための葬法ではなかった。さらに肉体は分割されることもありうる存在で、髪・爪・胞衣・臍の緒などの処理方法の中から、きわめて多様な習俗の実態を知ることができる。このように見てくると、従来の二元論の立場をもっては、あまりうまく説明できないことも多く、肉体とはもっと複雑な存在で、硬直した機械論ではとらえることができない。私たちは二元論のその基本的な枠組みは承認しつつも、もっとそれを柔軟にとらえていく必要があることであろう。

【キーワード】 肉体、葬送儀礼、葬地、死霊